

## 詩集『智恵子抄』における人称をめぐる A Study of Personal Pronouns in Chiekoshou

大島 龍彦

Tatsuhiko OSHIMA

### 1

ランプの下の夕食がすむと父はすぐ寝てしまう。子供との交渉などはまるで無い。そんな父に代って、兄は僕達の勉強を非常に重大に考え、中学に入ってからの子供との交渉などはまるで無い。そんな父に代って、兄は僕達に教えられたことで、いまでも役に立っているのは字を大切にすることを習慣である。

「誤字や宛字を決して書くな。少しでもおかしいと思ったら、必ず字引をひいて、正確な字を書かなければいけない。字引をひくことを荷厄介にするな。」

それを実にやかましくしつけられた。

(高村豊周『光太郎回想』有信堂より)

引用文は、高村光太郎の弟豊周<sup>注1</sup>が、在りし日の兄(明治三十七年・二十二歳頃)を回想<sup>注2</sup>したものである。

「人間は読み書きが出来れば良い位に考えていた」<sup>注3</sup> 父光雲に代わり、光太郎は「誤字や宛字を決して書くな。少しでもおかしいと思ったら、必ず字引をひいて、正確な字を書かなければいけない」と、弟たちを指導していた。

ところで、光太郎は、「近代詩は、むしろ耳をふさいで、眼から聲をきき、いはゆる聲無き聲を内に聴くところの黙讀に最上の詩の世界」<sup>注4</sup> が展開され、「發聲する場合には平讀み、即ち活字のやうに朗讀するのが私の経験によれば最

も詩をそこなはない」<sup>注5</sup>。と言う。また、「詩の本質は意味にもなく、声調にもなく、音韻にもなく、語彙にもない。それらのものは唯詩を形づくる素材であり、手段であり、方式であり、媒体であり、部品である」<sup>注6</sup>。と言う。

「黙讀に最上の詩の世界」が展開され、詩の本質が「語彙」等に無いとしても、「聲無き聲を内に聴く」時、例えば光太郎の『智恵子抄』に表記された「私」は、「わたくし」あるいは「わたし」、どちらで読むべきものであろう。

本稿では、言葉を大切にした光太郎が『智恵子抄』で使用した人称、特に自称と対称を通して、新たに『智恵子抄』の世界に迫ってみたい。

なお、テキストは中村稔編校本『智恵子抄』角川文庫を用いた。

## 2

ところで、『智恵子抄』の人称について考える前に、まずその変遷について簡潔に概観<sup>注7</sup>しておこう。

昭和二十七年、国語審議会が社会人としての標準的な言い方として自分を「わたし」、相手を「あなた」と呼ぶよう建議してから、今日（平成十八年）、男女とも丁寧な言い方として、目上の人に対して、また、改まった言い方をするときなどに用いる「わたくし」に対し、「わたし」はよりくだけた言い方で、現在では自分を指すもつとも普通の言葉となっている。

これら人称代名詞は、上代、「あ」「あれ」「わ」「われ」などと用いられ、中古「まろ」などが加わり変遷を続け、室町時代になって「わたくし」が登場した。その後、「わたくし」が広く使われ、近世前期には「わたし」が新しい語形として登場する。また、近世後期「お前さん」「あなた」はともに最高の待遇価値を有していた。が、「お前さん」の価値下落で「あなた」の待遇価値が上がり、明治期、子供が親に使うこともあったほど、「あなた」は最高の敬意を表していた。さらに、近世に書生用語として現れた「僕」に加え、「君」は明治期になって新しく人称代名詞として使われ出した。

例えば、明治十五年前後の東京の書生生活を描いた坪内逍遙の『当世書生気質』には、人称として「僕」「吾輩」「君」などが多用され、明治二十年頃の書生生活を描いた二葉亭四迷の『浮雲』では「吾輩」「僕」「私（わたし）」、男性から

男性には「君」、男性から女性には「貴嬢（あなた）」、女性から男性は「貴君・貴方（あなた）」などの意識的な使い分けがみられる。

これらの人稱は待遇表現（対人関係の認識「敬意」「親疎」を反映する表現法）と有機的に連関していて、場面に応じてどの表現を使用するかが決定される。

とまれ光太郎は明治後期から大正期に果敢な青年期を生き、「誤字や宛字を決して書くな。少しでもおかしいと思つたら、必ず字引をひいて、正確な字を書かなければいけない」と言葉に敏感であり、また、「詩は眞の言語活動で書かれねばならぬ。衣を剥けば日常語即詩語である」<sup>注8</sup>と言う。その光太郎が作詩した各詩編には、当時の人稱に対する意識が反映しているはずである。

光太郎が座右に備え<sup>注9</sup>、使用していた辞典『言海』は、人稱について次のように解説している。

『言海』（十八センチ×二十五センチ）

明治二十二年五月五日印刷、同月十五日出版第一冊（お以上）

明治二十四年四月十日印刷、同月二十二日出版第四冊（つ以下）

著作兼発行者 大槻文彦

わたくし（代）私。自稱ノ代名詞。此語、今、最モ口語普通ノ用トシ、尊長ヨリ同輩ニ通ジテ、謙ジテ用ル。

わたし（代）私。わたくしノ略。（馴レ親ミ用ル）

ぼく（代）僕。自稱ノ代名詞。ヤツガレ。（謙稱）

あなた（代）彼方。「彼<sup>アノ</sup>之方ノ約轉」

（一）方向<sup>ムキ</sup>ノ代名詞。彼ノ方。カナタ。

（二）以前。

（三）轉ジテ、對稱ノ代名詞。今、尊長ヨリ同輩ニ掛ケテ相語ルニ、最モ多ク用ル。

きみ（代）君。對稱ノ代名詞。敬フニ用ル。

\*引用した『言海』に自称「俺」の項目無し。

なお、光太郎が実際に手許に置き頻繁に用いていたものは、明治三十七年二月二十五日第一版発行の前記縮刷版『言海』（十二センチ×十五センチ）の第二版（明治三十七年五月十日の辞典）であったかも知れない。この明治三十七年は光太郎が兄弟達に「字引をひくことを荷厄介にするな」と「やかましく言った」頃で、縮刷版『言海』を用いたとしても内容に大きな変化はない。

次に挙げる『大日本國語辞典』は、光太郎が使用していたかどうかは今分らない。が、「少年の時から辞典や事典というものにひどく興味を持っていた、そういうものが知識の根源になるという一つの信念を抱いていたらしい」<sup>注10</sup>光太郎が三十七歳の時に出版された辞典であり、参考までに引用しておく。

# 『大日本國語辞典』

大正八年十二月十八日初版発行（大正九年一月二十八日第六版参照）

著作者（共著） 上田萬年・松井簡治

発行者 富山房

わたくし 私 （代）男女ともに通じて用ふる自稱の代名詞。名義抄「私ワタクシ」

御伽草子「わたくし、不慮に戀といふ病ひに犯されて」

わたし 私 （代）わたくし（私）の略。わたくしよりは、馴れ馴れしき人に對する場合に用ふ。

ぼく 僕 （代）自己の謙稱。やつがれ。

おれ 己 （代）自稱の代名詞。多く、同輩又は其の以上に對しいふ詞。われ。

あなた 彼方（代）「彼（ア）の方の義」

（一）向うの方。かなた。あち。あちら。

（二）それよりまへ。以前。

きみ 君 (代) 對稱ノ代名詞。  
(三) 同輩若しくは其の以上の人を敬愛して呼ぶ詞。貴下。

これらの解説のうち、特に「今、最モ口語普通ノ用トシ、尊長ヨリ同輩ニ通ジテ、謙ジテ用キル」「わたくし」と「馴レ親ミ用キル」「わたし」、そして、「今、尊長ヨリ同輩ニ掛ケテ相語ルニ、最モ多ク用キル」「あなた」と「敬フニ用キル」「君」に注目したい。

明治期の「わたくし」「あなた」「君」の人称には親疎敬意があり、「僕」「君」などは斬新な表現だったようである。

### 3

『智恵子抄』の人称（自称・対称）を一覧化すると次のようである。なお、制作年月日に前接する算用数字は、『智恵子抄』への挿入詩であることを示し、後述に配慮して便宜上私的に施したものである。また、挿入詩の配列は『智恵子抄』の構成に従った。非挿入詩<sup>注11</sup>は人称の特徴を補佐するために一部取り上げた。

#### 『智恵子抄』の人称一覧

制作年月	挿入詩日	人称（自称・対称）	非挿入詩
M 44 6・14			廢顔者より 余・君 泥七宝 君 ピフテキの皿 君 あをい雨 私
M 45 6・21			



[illegible]

②⑨ 3 ・ 31	2 ・ 11	S 15	②⑧ 7 ・ 16	S 14	②⑦ 6 ・ 11	S 16	②⑥ 2 ・ 23	S 14	②⑤ 8 ・ 27	②④ 6 ・ 20	S 13	②③ 7 ・ 12	②② 7 ・ 11	S 12	②① 4 ・ 25
梅酒			亡き人に		荒涼たる帰宅		レモン哀歌		或る日の記	山麓の二人		値ひがたき智恵子	千鳥と遊ぶ智恵子		風にのる智恵子
わたし・智恵子			私・あなた		私・智恵子		わたし・あなた・智恵子		私・智恵子	わたくし・妻		わたし・智恵子	私・智恵子		わたし・智恵子
蟬を彫る わたくし															

## 4

『智恵子抄』『人に』以前、自称「余」が僅かに用いられているが、入抄各詩の人称の基本形は「私」「あなた」である。大正元年（明治四十五年）八月十八日から十一月三十日、「われ・わが・僕」が短期間に集中して使用され、七年間の詩作空白の時代を経て、大正十年に入抄以外の詩で「わたし・わたくし」という平仮名書きの自称が見られる。『智恵子抄』における対称の基本形だった「あなた」が、大正十四年を境に「智恵子」に取って代わられるが、自称「私」に変化はない。一体、人称の基本形「私」は「わたし」なのか「わたくし」のなか。

この問題を思考する際に最も注目されるのは、「同輩若しくは其の以上の人を敬愛して呼ぶ」時に、また「今」「最モ



多ク用半」られ、『智恵子抄』全体に分布している対称「あなた」である。

②⑥「レモン哀歌」の、

わたしの手を握るあなたの力の健康さよ

あなたの咽喉に嵐はあるが

かういふ命の瀬戸ぎはに

智恵子はもとの智恵子となり

生涯の愛を一瞬にかたむけた

(詩の一部引用・傍線は私的に施した)

に注目すると、「わたし」と「あなた」、「わたし」と「智恵子」、それぞれ相対する関係が、①「人に」③「おそれ」⑧「人類の泉」⑫「樹下の二人」⑰「亡き人に」、それぞれの「私・あなた」の「私」が「わたし」であり、②⑥「レモン哀歌」の「わたし・智恵子」に加え、②①「風にのる智恵子」②③「値ひがたき智恵子」②④「梅酒」の「わたし・智恵子」から、⑭「鯨」⑮「夜の二人」⑮「あどけない話」⑮「同棲同類」②②「千鳥と遊ぶ智恵子」②⑤「或る日の記」②⑦「荒涼たる帰宅」の「私・智恵子」の「私」もまた「わたし」で、『智恵子抄』における「私」は「わたし」であった可能性が高いことが分かる。近世前期に新しい語形として登場した「わたし」は、明治二十四年頃で「最モ口語普通ノ用トシ」(『言海』)て用いられた「わたくし」に取って代わり、明治後半から大正前期には大衆的位置を獲得していたようである。

親交の深さは今問わないが、文学仲間で光太郎と同年(明治十六年)生まれの志賀直哉の書簡<sup>註12</sup>に見る人称は、木下利玄、武者小路実篤、有島生馬など友人とは日常「僕」「君」が一般的で、例えば有島に送った明治三十九年二月六日の手紙には、「君は依然僕の度々話する人の一人なのさ」といった具合である。自分が謙らなければならないような場合には、「先生は其後如何御暮らしなされますか。私は去る三十一日から当鹿野山へ一人で参りました」(明治三十九年四月五日清水澄宛)と「私」と使う。本人のルビが無い以上志賀直哉は「わたし」と意識していたのかも知れないが、この場合「わたくし」と読むのが待遇法的にはかかっている。

小説作品では登場人物の社会的位相や作品内時間によって当然人称も異なるが『志賀直哉全集』(改造社)には「い

いだろう。僕もあの人には教わつたよ」「それはさうと君は何科だつね」（小説「無邪気な若い法学士」<sup>注13</sup>）と「僕」  
「君」の使用もあり、また、「私も弱いにんげんです」（小説「濁つた頭」<sup>注14</sup>）、「貴方<sup>あなた</sup>の所が初めてですから」（小説「あ  
る一頁」<sup>注15</sup>）とある。

明治四十三年四月一日発行の「白樺」第一巻第一号に発表した小説「網走まで」には、「母さん、あたいには」と子  
供が不平を言うシーンがある。子供は自称「あたい」と言ったか。

或る女性をめぐつて光太郎と確執のあった評論家木村艸太の『魔の宴』<sup>注16</sup>には、光太郎との出会いのシーンを艸太  
に語る河内樓の若大夫（真野しま）の発言が記されている。

「向うのお店のわきであたしを描いてるひとがあるんじゃないの、よ。いやだから、あたし、すつと立つて、奥へ  
行つちまつた。そうすると、そのひとが来るようになったの。なんでもフランスにいたとき好きだつた、ジョーゼ  
ットつてひとに、あたいが似てえるからなんだつて」

最後にはぐつと碎けた嬌態を示す語気で、「わたしはそんなわたしよ。」といわぬばかりにこういつて、このことを  
向うから私に傳えた。（傍線は私的に施した）

また、渡欧していた小山内薫の帰朝の迎えシーンから始まる第四部、清子が「カフェ・ライオン」をやめて「新時  
代劇協会」の女優になる場面には、「わたし、あのドウゼの話のこと思ひだしますよ。小山内さんがこんど見て来いたら、  
話を聞きたいんだけど」などとあり、この後「僕」「わたし」あるいは「私」がつづき、一カ所、「わたし、真島。」  
と受けていつた。洗練された東京弁で、これもこのひとの魅力のひとつだつた」とある。「あたい」「わたし」が一般化  
していた様子が窺える。なお、「わたくし」が「洗練された東京弁」の一つだったようである。

それでは当の光太郎の日常はどうだったのか。現存する書簡、明治三十四年から大正四年頃の光太郎の人称使用状況  
を概観すると、日常父光雲、森林太郎（鵬外）与謝野寛、あるいは東京美術学校の月報などには自称「小生」が主に用  
いられ、水野葉舟や津田清楓、荻原守衛など友人や兄弟たちには「僕」「君」が一般的である。確認した書簡の中で「私」  
「あなた」は、智恵子の妹セキと北原白秋への使用である。これらの使い分けの理由にも興味があるが、今は問わない。  
ただ、光太郎が自称の使い分けをしているという事実注目しておきたい。

既記引用の大正八年十二月十八日初版発行の『大日本國語辞典』には、「わたくし 私(代) 男女ともに通じて用ふる自稱の代名詞」、「わたくし 私(代) わたくし(私) の略。わたくしよりは、馴れ馴れしき人に對する場合に用ふ」とあり、明治前期「此語、今、最モ口語普通ノ用トシ」たという「わたくし」の解説は姿を消している。

しかし、辞典『言海』にあった解説、「わたくし」を「わたくしノ略。(馴れ親ミ用キル)」は、『大日本國語辞典』にも、「わたくし(私) の略。わたくしよりは、馴れ馴れしき人に對する場合に用ふ」とある。

それでは、①「人に」における光太郎にとっての智恵子は「馴れ親」しんだ「馴れ馴れしき人」だったのであろうか。「馴れ馴れしき人」の範疇に問題はあるが、大正元年八月十八日作の②「或る夜のころ」では、熱病のような二人の感情からの覚醒を求める光太郎は、智恵子と「手を取りて黒き土を踏み」という関係にあり、同月作の③「おそれ」では、「恋」という好意を告げようとする智恵子の感情吐露を一旦制止しているものの、④「或る宵」では、「我等はただ愛する心を味へばいい」と智恵子を論じ、続く⑤「郊外の人に」と⑥「冬の朝のめざめ」では、智恵子を「愛人」(愛しい人の意)と捉えている。つまり、大正元年(明治四十五年)八月十八日から十一月三十日に集中して用いられた「われ・わが・僕」の前後の自称「私」はその意味を異にするのである。

明治四十五年六月二十一日作の、『智恵子抄』の前詩「あをい雨」では、智恵子を連想させる「自由自在な不可思議力」を持った「貴い、美しい」人が光太郎を待っていると描きながら、当時交際していたレストラン「よか様」のお梅さんを「マドモアゼル」と呼び、作中に、「夕方、雷門のレストオランで/怖い女将の眼をぬすんで/待つてゐる、マドモアゼルが/待つてゐる、私を——」と詠う。また、当時、智恵子は寺田三郎との婚姻話が進行中であり、「あをい雨」作詩からおよそ一カ月後に作った詩「N——女史に」<sup>注17</sup>(詩「人に」の原型)の段階では、「馴れ親」しんだ「馴れ馴れしき人」とは言えない。その詩「N——女史に」は、『大日本國語辞典』の「わたくし」の解説に用いた御伽草子の用例「わたくし、不慮に戀といふ病ひに犯されて」を連想させるような、

はかない、淋しい、焼けつく様な

それでも恋とはちがいます

——そんな怖いものぢやない——

サンタマリア！

あの恐ろしい悪魔から私を守護り下さい

という表現がある。

この詩「N——女史に」は、三年後、光太郎が第一詩集『道程』（大正三年十月）に載録する際に題名を「——に」に改め、内容も大幅に改訂し、更に、昭和十六年七月に題名を「人に」と改め、『智恵子抄』冒頭に掲載したものである。

大正二年九月婚約、大正三年二月には同棲生活が始まり、同年十二月二十二日に結婚披露をしている二人である。内容を大幅に改めた大正三年には「馴れ親」しんだ「馴れ馴れしき人」と言える。が、詩「人に」はどのように改訂されても、作品内時間が明治四十五年七月であり、その頃の二人の状況から「馴れ親」しんだ「馴れ馴れしき人」とは言えない。だとすれば、題名を「人に」に改め『智恵子抄』の冒頭に掲載した時点の光太郎の意識が譬え「私」が「わたし」であっても、①「人に」の「私」は「わたくし」であってもいい。

丁度「N——女史に」を書いた頃を想起したと思われる光太郎の詩に、「あの頃」（昭和二十四年十月三十日清書）がある。詩中「わたくしの猛獸性をさへ物ともしない／この天の族なる一女性の不可思議力に／無頼のわたくしは初めて自己の位置を知った。」とある。

なお、『智恵子抄』において明らかに自称「わたくし」を用いているのは、②「山麓の二人」である。作品内時間は昭和八年八月二十六日の事で、③「人生遠視」に前接する。「妻」の用語は『智恵子抄』の中では、この二つの詩に用いられている。

## 山麓の二人

二つに裂けて傾く磐梯山の裏山は

陰しく八月の頭上の空に目をみはり

裾野とほく靡いて波うち

芒ぼうぼうと人をうづめる

半ば狂へる妻は草を藉いて坐し

わたくしの手に重くもたれて

泣き止まぬ童女のやうに慟哭する

——わたしもうぢき駄目になる

意識を襲ふ宿命の鬼にさらはれて

のがれる途無き魂との別離

その不可抗の予感

——わたしもうぢき駄目になる

涙にぬれた手に山風が冷たく触れる

わたくしは黙つて妻の姿に見入る

意識の境から最後にふり返つて

わたくしに縋る

この妻をとりもどすすが今は世に無い

わたくしの心はこの時二つに裂けて脱落し

聞として二人をつつむ此の天地と一つになった

(傍線は私的に施した)

詩中の光太郎の自称「わたくし」には、智恵子の発言「わたし」との差異化とだけでは片付けられないものがある。

大正三年に一所になった光太郎と智恵子は、入籍しないまま二十年に亘る共同生活を送った。昭和六年夏、智恵子の精神に変調が現れてから二年後の昭和八年八月二十三日に、それまで意味のなかった入籍をした。仮に光太郎の死後、残された智恵子の支援の入籍という見方もある。が、この時意味のない入籍をすることに意味があったのである。しかし、その「妻をとりもどすすが」今は無かった。「宿命の鬼」にさらわれて行く智恵子を「黙つて」見つめている

ことしか出来ない無力な光太郎は、絶対的不可抗なものに対し、謙虚にならざるを得なかったのである。

このように自称「わたくし」を用いるとき、そこには必ず謙虚な光太郎がいる。『智恵子抄』が成立した昭和十六年までに、光太郎が明らかに「わたくし」と自称した詩は四つある。

その一つ、大正十年十一月一日発行の『明星』第一巻第一号に発表した詩「雨にうたるカテドラル」<sup>注18</sup>は、明治四十一年六月十一日の夜からおよそ一年間住んで、「はじめて彫刻を悟り／詩の真実に開眼され」（詩「バリ」）た巴里時代を回想して作った詩である。「外套の襟を立てて横しぶきのこの雨にぬれながら、／あなたを見上げてゐるのはわたくしです。／毎日一度はきつとここへ来るわたくしです。」光太郎が「見上げたいばかり」に濡れ鼠になって來たのは「ノオトルダムドパリのカテドラル」であつた。

ジプシー娘のエスメラルダをめぐる副僧正と青年士官、鐘樓守「せむしのカジモト」の恋の葛藤を描いたビクトル・ユゴーの小説の舞台となつたノートルダム大聖堂は、十二世紀、聖母マリア崇拜の氣運の高まりの中で建立された。「ノートルダム」とは、「われらの貴婦人」の意味で聖母マリアを指す。「おうノオトルダム、ノオトルダム、／岩のやうな山のやうな鷺のやうなうづくまる獅子のやうなカテドラル」「あなたを見上げてゐるのはわたくし」光太郎だという。

今もパリの中心、シテ島に建つノートルダム寺院は、中世ゴシック建築の結晶といわれ、ジャンヌ・ダルクの名誉回復裁判、ナポレオン一世の戴冠式など歴史的事件の舞台でもあつた。

また、仙人である「白髪の老人」に「自分を辱めずに餓死せぬ法を、／あさましい律に服せず<sup>おきて</sup>に生きられる法を。」「悩める者なるわたくし」光太郎に「おきかせください」と懇願した詩「花下仙人に遇ふ」<sup>注19</sup>や、敬愛していた美学者渡邊吉治（昭和五年十月十一日三十七歳で没）の死を認めたくない光太郎が、告別式の案内の葉書を懐にしたまま、「渡邊吉治いきかへれ、いきかへれ、いきかへれ。／黒梓の葉書がふところにある。／わたくしはお通夜にゆかない。」と神田を「いきかへれ」と何度も叫びながらうろついている自身の姿を描いた詩「耳で時報をきく夜」<sup>注20</sup>、そして、「乾いて枯れて手に軽いみんみん蝉は／およそ生きの身のいやしさを絶ち、」その羽は「もろく薄く透明な天のかげら、」「靈氣の翼」で、「わたくしの刻む檜の肌から／木の香たかく立つて部屋に満ちる」。光太郎の仕事場は、「天の何處かに浮いてるやうだ。」という詩「蟬を彫る」<sup>注21</sup>等々いずれの詩にも「わたくし」と自称する謙虚な光太郎の姿がある。

5

光太郎は作詩を開始してから一九二一年（明治四十五年・大正元年）までの各詩の自称は「われ・わが」が主体でまれに「余」を使用した<sup>24</sup>が、大正二年十二月から翌大正三年二月までの三ヶ月間「僕」を用い、大正十五年から昭和初期にかけてまれに「おれ」を用いた。

自称「私」は明治四十五年六月二十一日作の『智恵子抄』の前詩「あをい雨」に登場し、昭和十六年六月十一日作の詩「荒涼たる帰宅」まで、一般的に用いられた。その読みは「わたし」であった可能性が高く、「わたくし」と言うとき、そこには謙虚な光太郎がいた。ただ、詩「人に」における「私」は、待遇法的に「わたくし」と解釈することができた。光太郎が真摯な青年層の詩人から多くの刺激を受けたというその中のひとり宮沢賢治<sup>25</sup>は、「心象スケッチ」春と修羅の「序」を、「わたくし」で統一し、「おれはひとりの修羅なのだ」と一部「おれ」（地文）という自称も見られるものの、詩「小岩井農場パート九」、詩「永訣の朝」他「わたくし」で統一している。つまり、宮沢賢治の自称の基本形は「わたくし」と言っている。

ところが、光太郎が遺族に頼まれ、詩集の「序」を書いたことのある八木重吉<sup>26</sup>の習作期、御影時代初期（大正十年四月から十一月）の詩稿に見る自称は、「わたし・わたくし・僕・俺れ・おまえ・あなた・君」などと多様で、また、一編の詩中にも、「私・わたくし・わたし」（詩集「不安な外景」）が見られる。

また、光太郎が刺激を受けたというその若き詩人のひとり萩原朔太郎の詩集『月に吠える』（大正六年二月発行）には、自称「おれ」で統一した詩「危険な散歩」や「わたし」で統一した詩「恋を恋する人」、あるいは「僕」で統一した詩「大工の弟子」がある一方で、「わたし・わたくし・私」が一編の詩中に混在した詩「内部に居る人が畸形な病人に見える理由」などもある。

萩原朔太郎は、「言葉や文章では言ひ現はしがたい複雑した特種の感情を、私は自分の詩のリズムによつて表現する。併しリズムは説明ではない。リズムは以心伝心である」<sup>27</sup>と言ひ、光太郎も、「詩の本質は、その詩全体が人を打つて来る不可避不可抗の感動力であつて、これはもともと無形、無名のものである。指示し得ないけれども人の心の実存する以心伝心の磁力である」<sup>28</sup>と言う。光太郎はまた、「詩の世界では、表現が方法の位置を取らない。詩は直接に表

現に抛り、表現そのものが詩に憑かれる。それゆゑ、詩は解体する事が出来ず、説明し得るところは媒材の範囲にとどまり、「發言された詩の言葉は人生の地下礦脈のほんの一點に過ぎない」<sup>注26</sup>と云う。が、自立しようとする意識の表れか、大正三年の後半、結婚披露を公にしてから書生言葉として発展してきた「僕」の使用が無いことや、大正十四年を境に基本形だった対称「あなた」に代わって「智恵子」が主体になっていることなど気になって仕方がない。

## 注

注1 高村豊周 明治二十三年七月一日、木彫家高村光雲の三男として生まれる。長兄は光太郎。昭和三十九年、重要無形文化財保持

者（人間国宝・鍔金）に認定される。昭和四十七年六月二日死去。享年八十一歳。

注2 高村豊周『光太郎回想』有信堂による。

注3 注2に同じ。

注4 「朗讀詩について」昭和十六年九月一日発行『文芸』第九卷第九号による。

注5 「詩人の知つた事ではない」昭和八年七月一日発行『音楽評論』第四号による。

注6 「詩の本質」昭和十八年六月三十日・七月一日『毎日新聞』による。

注7 人称の変遷とその用例については次の本を参照した。

①金田一春彦・林大・柴田武編集責任『日本語百科大事典』大修館書店

②佐藤喜代治編『国語学研究事典』明治書院

注8 昭和六年四月二十九日発行『読売新聞』「私の言葉」欄による。

注9 注2に同じ。

注10 非挿入詩は『高村光太郎全集』筑摩書房増補版による。

注11 『志賀直哉全集』岩波書店による。

注12 小説「無邪気な若い法学士」明治四十四年三月一日発行「白樺」第二卷第三号に発表。

注13 小説「濁つた頭」明治四十四年三月一日発行「白樺」第二卷第三号に発表。

注14 小説「ある一頁」明治四十四年六月一日発行「白樺」第二卷第六号に発表。

注15 木村艸太『魔の宴』昭和二十五年五月三十日発行・朝日新聞社刊による。

注16 注10に同じ。

注17 注10に同じ。



- 注18 詩「花下仙人に遇ふ」昭和二年五月一日発行の『炬火<sup>くまろ</sup>』五月号に掲載。
- 注19 詩「耳で時報をきく夜」(昭和五年十月十六日作、十二月一日発行の『詩洋』に発表。
- 注20 詩「蟬を彫る」昭和十五年二月三十日発行『詩と美術』第二卷第二号建国記念号に発表。
- 注21 宮沢賢治の詩。
- 注22 八木重吉の詩。
- 注23 詩集「月に吠える」「序」大正六年二月発行。
- 注24 「詩の本質」昭和十八年六月三十日・七月一日『毎日新聞』発表。
- 注25 「詩と表現」昭和十八年一月『国語文化』第三卷第一号に発表。
- 注26 「詩の深さ」昭和十七年九月一日発行『日本詩壇』第十卷第九号に発表。